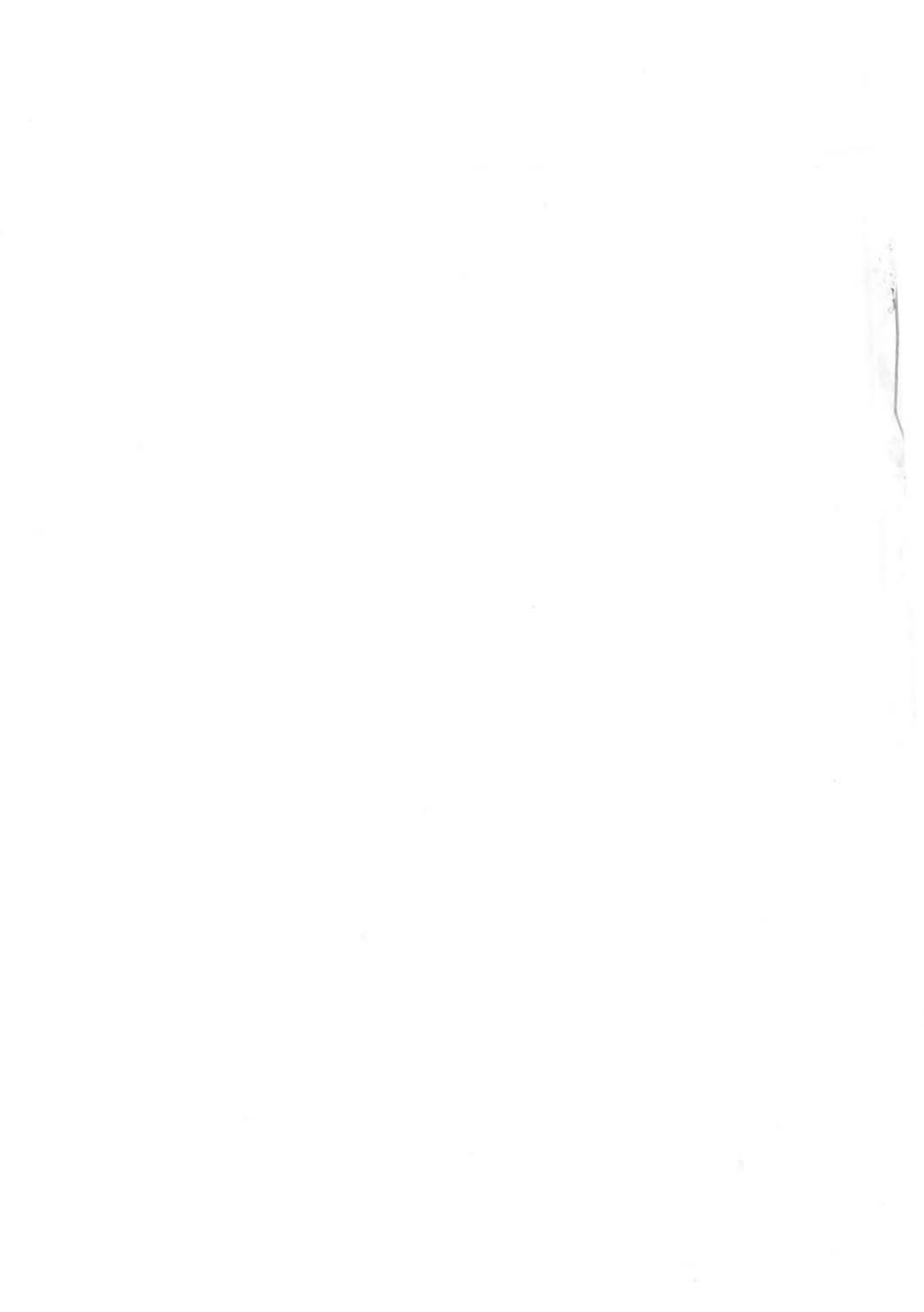


『物質文化』第53号 抜刷(1990. 6)

縄文時代の集落研究と狩猟・
採集民研究との接点

羽 生 淳 子



縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点

羽 生 淳 子

I. はじめに

戦後の縄文時代研究において、集落の研究は、遺物の編年研究に次いで、多くの研究者の関心を集めてきた分野である。集落址を扱った論考は、通常、集落論と呼ばれ、縄文時代研究の中のひとつの重要な分野として発達してきた。

今日における縄文時代集落研究の大部分は、直接的・間接的に、和島誠一（1948, 1955, 1958 a, 1962）による集落研究の影響を受けている。和島の理論的枠組は、マルクス主義歴史学の流れを汲むものであり、その主たる関心は、生産力の発展と労働手段の発達、採集経済の矛盾の顕在化による生産経済への転換、共同体の社会構造と社会組織、労働の協業と分業化、等であった（和島1962）。このような学史的背景を持つ縄文時代の集落研究は、縄文集落の定住性を前提として、集落内の規則的な住居址配置に象徴される社会規制の存在を強調してきた。和島とはその理論的立場を異にする研究者の間においても、縄文時代の集落は定住的かつ大規模であったとする考えが一般的に認められてきた。

近年、一部の縄文時代研究者は、このような伝統的な集落研究の視点に疑問を示し、集落遺跡のデータを再検討する必要性を指摘している。しかしながら、これらの研究は、現在までのところ部分的なデータの提示にとどまっており、伝統的な解釈に代わり得る縄文時代の集落像は明らかにされていない。その意味で、縄文時代集落研究は、ここ数年、行き詰まりの状態にあるといえる。

筆者は、縄文時代の集落研究をさらに前進させるためには、和島以来の史的唯物論に代わる新しい理論的枠組が必要であると考え。本稿では、このような立場に基づき、第一に、縄文時代の集落研究の歴史を振り返り、その成果と問題点を明らかにする。第二に、集落研究与生業活動の研究との関わり的重要性を指摘し、ビンフォードのフォーレジャーとコレクターのモデルを中心として、

欧米における狩猟・採集民研究と縄文時代集落研究との接点について論じる。以上を通じて、縄文時代集落研究の今後の可能性について考える。

II. 縄文時代の集落研究

縄文時代の集落研究を扱った論考は数多い。集落研究の学史的な流れは、藤森(1966)、林(1979)、小林(1980)、長崎(1980)、後藤(1988)らによってすでにまとめられている。ここでは、和島の集落研究とその影響を中心として、集落研究における基本的な枠組とその問題点について考える。

(1) 和島誠一の集落研究

縄文時代集落の研究を扱った論考の数多くは、理論的ないし方法論的に和島による集落研究の影響をうけている。和島は、マルクス主義考古学者であり、戦前には、三澤章のペンネームで、渡部義通⁽¹⁾を中心とする「日本歴史教程」の執筆グループに参加し（原 1972, 市原1984）、史的唯物論の立場から考古学資料を用いた古代史の研究に取り組んでいた（三澤1936, 1937）。敗戦後、考古学の研究は政治的な制約から解放され、史的唯物論は歴史学研究における主要な理論的枠組のひとつとなった。これとともに、和島もマルクス主義歴史学の立場から考古学的な研究を再開した。

1948年、和島は、「原始聚落の構成」を著し、縄文時代から古墳時代における集落の変遷を論じた。この論文は、日本の先史・原史時代にはいわゆる大家族は存在しなかった、と主張する戸田貞三の社会学的な考察に反論する形で書かれている。戸田が、登呂遺跡における住居址の規模を検討し、それぞれの住居址の成員を一家族とみなしたのに対し、和島は、一住居址を一家族とみなすことの問題点を指摘し、集落の性格の解明と集落の構成部分としての住居址研究の必要性を強調した。そして、マルクス主義歴史学の理論的枠組を用いて、考古学的な集落遺跡の資料の解釈を試みた。

この論文は、二つの点で、その後の縄文時代集落研究の理論に大きな影響を与えた。第一に、この論文において、和島は、縄文時代を氏族共同体的な社会であると結論づけた。和島は、縄文前期埼玉県水子大応寺前貝塚（酒舘他1940）、中期千葉県姥山貝塚（松村他1932）、後期千葉県草苅場貝塚・荒屋敷貝塚・大門貝塚における貝層の分布状況および部分的発掘調査の結果から、各遺跡において、竪穴住居址は円形ないし馬蹄形に分布していると考えられる点を指摘した。このような事実に基づき、和島は、これらの集落は全体としてある規制の下に営まれていたと考え、個々の竪穴住居址の独立性よりも集落全体としての強い統制力の存在を強調した。そして、このような構成を示す集落の社会的性格として、氏族共同体的な関係を想定した。論文の後半では、和島は、弥生時代における農業の開始と発展、階級分化の発生と氏族共同体の分裂、さらに時代が降って、古代遺跡における「大家族」の存在と、それが集まって形成されるさらに大きな共同体の存在とを論じた。以上のような和島の視点は、渡部義通、藤間生大、石母田正らのマルクス主義歴史学者による社会構成論、古代家族論、共同体論の延長線上に位置づけられるものであり（原1972:390）、その後の縄文時代集落研究における社会的な側面、特に、共同体への関心の基礎を築いた。

第二に、この論文において、和島は、縄文時代の早期から後期にわたる縄文社会の変化を、漸移的な定住性の強化と人口の増加という観点から解釈しようと試みた。社会発展段階論は、戦後のマルクス主義歴史学を特徴づける主要な構成要素のひとつであったが（永原1974:12）、和島は、この図式を、縄文から弥生、古墳時代への移り変わりを論じる際だけでなく、縄文時代の内部における変化を説明するのにも適用した。縄文中期長野県尖石遺跡（宮坂1946）・千葉県姥山遺跡における定型的な集落の形成とその存続は、縄文人の定住性を示す証拠として扱われ、縄文早期から中期にかけて縄文人の定住性が強まっていく、とする解釈が示された。このような定住的な生活の背景として、和島は、生産力の発達、すなわち集落規模の拡大によって示される人口の増加が大きな役割を果たしたと推測した。以上のような和島の解釈は、縄文人の生活を論じる際の基礎的な前提として広く

研究者の間で受け入れられ、定住の度合は、文化の発展段階を示すひとつの指標として使用されることとなった。

「原始聚落の構成」は、考古学的な研究における集落遺跡調査の重要性を明らかにした点で、戦後の日本考古学における集落研究の出発点を形成した。和島以前に縄文時代集落の規模や住居址の配置を論じた研究としては、宮坂英次（1946）による尖石遺跡の発掘調査・分析があるのみであり、当時の大部分の縄文時代研究者の関心は、出土遺物の編年にむけられていた。和島は、この論文を通じて、遺構の調査・分析の重要性を示した。この論文を契機として、縄文時代の集落遺跡を全面的に発掘調査する必要性が強く認識され、1955年には、和島を中心とした縄文前期神奈川県南堀貝塚の発掘調査が実施された（和島1958a）。この調査の結果は、集落遺跡を発掘調査する際のモデルケースとして広く引用され、1960年代以降の集落遺跡の調査方法に大きな影響を与えた。

（2）社会的側面への関心

南堀貝塚の発掘調査以降、縄文集落研究の主流は、馬蹄形集落の分析を中心として、縄文時代の社会的側面、特に共同体のあり方に焦点を当てるようになった。多くの考古学者は、和島の氏族共同体論を直接的・間接的に継承し、集落内における定型的な住居配置と、そこから推測される社会的な規制の存在とを強調して、原始共同体のあり方を論じた（麻生1960、菅原1972、岡本1975、勅使河原1989）。マルクス主義理論を基盤とした、考古学以外の諸分野の成果（古代史の藤間〔1951〕、社会経済史学の大塚〔1955〕、文化人類学の泉〔1962〕など）も、共同体の研究に影響を与えた。

遺跡内における遺構分布の研究とともに、遺跡分布に基づいた生活圏ないし生活領域、集団領域の研究（市原1959、向坂1970、堀越1972、林1974、1975）もさかに行われた。これらの研究は、自然環境を考慮に入れているものの、その最終目的は、共同体、ないし協業の単位としての集団の復元に置かれている場合が多く、その意味では、遺跡内の遺構分布から共同体のあり方を論じる諸研究と理論的な基盤を共にしていた。

水野正好（1963、その論旨は、前年の1962年に坪井清足によって紹介されている）による縄文中

期長野県与助尾根遺跡の資料(宮坂1950, 1957)の分析は、縄文集落研究における社会的側面への関心をさらに拡大した。縄文時代においては、2棟を一単位とする3小群(6棟)が村の基本を構成すると考えた水野の一連の論考(水野1963, 1968, 1969a, 1969b, 1970)は、資料操作が恣意的であるとして批判(後藤1970:116-117, ふれいく同人会1971)を浴びたにもかかわらず、集落内における住居址のグルーピングを論じるその後の諸研究(たとえば、向坂1970, 村田1974, 長崎1977, 丹羽1982)の端緒を開いた。親族組織の復元に関する関心も高まり、文化人類学者の大林太良(1971)は、水野の推論を前提とした上で、与助尾根遺跡における双分制組織の存在を論じた。さらに、水野の研究を契機として、縄文社会の宗教的な側面に関する言及もさかに行われるようになった(坪井1962, 長崎1973)。

以上に示した諸研究は、その多くが、縄文時代の社会的側面とのかかわりにおいて集落遺跡を論じたものであった。これらの研究の主たる関心は縄文時代の社会構造に向けられており、生業に関する具体的なデータが集落研究に用いられることはまれであった。例外としては、北海道アイヌの民族誌事例との比較を通じて、縄文時代の遺跡分布と生業との関連性を生態学的に分析する必要性を指摘した渡辺仁(1964)の研究、サイト・キャッチメント分析(Vita-Finzi and Higgs 1970)の方法を用いて、縄文時代遺跡のテリトリー⁽²⁾を半径10キロメートル⁽³⁾と仮定し、遺跡出土の魚貝類遺存体の分析結果と遺跡の周囲半径10キロメートルの自然環境とを比較した赤澤威(Akazawa 1980)の研究などがあげられる。これら一部の例外を除いては、縄文時代の集落研究は、生業の研究とは基本的に分離したまま今日にいたっている。

(3) 「定住的」な「大集落」への疑問

以上、縄文時代の集落を論じた研究の大部分は縄文時代の社会的側面、特に共同体のあり方に焦点をあててきたことを述べた。上記の諸研究の大部分は、共同体への関心と共に、和島の第二のポイントである、縄文人の定住性に関する視点も受け継いだ。その結果として、多数の住居址を伴う馬蹄形の集落遺跡の存在は、縄文人の定住性を示す証拠として受け止められてきた。史的唯物論と

は理論的立場を異にする研究者の多く(たとえば、渡辺仁1966, Watanabe 1986, Koyama 1978, 小山1984)も、同様に、縄文時代の集落は基本的には定住的であったとの解釈を示してきた。

近年、一部の考古学者は、このような伝統的な縄文集落観に疑問を示し、集落遺跡のデータを再検討する必要性を示唆している。石井寛(1977)は、住居址覆土の堆積状態の観察に基づき、縄文時代の住居址は継続的に利用されたのではなく、断続的に居住されたのではないかと主張し、縄文集落の定住性を強調する伝統的な視点への疑問を表明した。土井義夫(1985)は、縄文時代の集落遺跡を大規模と小規模の二者に分類し、後者が縄文集落の一般的なあり方であり、前者は、後者の「時間的累積の結果として出現している特殊なあり方」であるとする考えを示した。黒尾和久(1988)は、縄文時代中期の「大規模集落」における住居址間の土器の接合関係から、実際に一時点に存在した住居址の数は「小規模集落」と大差ないものであったと結論した。縄文前期諸磯式期における住居址遺跡について、総住居址数と各細分型式期毎の住居址数を調べた羽生の分析は、住居址数の少ない遺跡が全体の中で高い割合を占めていることを明らかにした(Habu 1988, 羽生1989)。

これらの論考は、定型的な集落遺跡の存在に基づいて縄文集落は定住的かつ大規模であったと考える、伝統的な解釈に対する疑問を表明したものである。しかしながら、現在までのところ、これらの研究は、従来の視点の問題点を指摘する段階にとどまっており、新しい縄文時代集落観が提示されるにはいたっていない。

縄文時代の研究において、史的唯物論とは異なった視点から集落遺跡へのアプローチを試みた例としては、小林達雄(1973, 1980, 1981, 1986, 1988)による「セトルメント・パターン論」がある。小林は、多摩ニュー・タウン地域における遺跡分布調査の結果に基づき、縄文時代のセトルメントは、その機能別にA～Fの六つのパターンに分類し得ることを主張した(小林1973)。さらに、1980年には、キャンベル(Campbell 1968)によって記載されたトゥルアクミュート(Tuluqumiut: 中央アラスカ北部のヌナミュート・エスキモー[Nunamiut Eskimo])の一部族の民族誌データを引用し、縄文遺跡におけるセトルメント・パターンA～Fを

解釈するに際しては、キャンベルの記載したツールアクミュートのセトルメントのタイプⅠ～Ⅵ⁽⁴⁾が参考になるとの考えを示した。

小林の「セトルメント・パターン論」は、アメリカ考古学におけるセトルメント・アーケオロジー⁽⁵⁾の方法論を縄文時代の研究に適用しようと試みたものである。アメリカにおける1950年代から1960年代のセトルメント・アーケオロジーについては、キーリー(1971)が部分的に紹介⁽⁶⁾しているものの、これを実際に日本考古学に適用したのは小林が初めてであった。

小林によるセトルメント・パターンA～Fの設定は、遺跡の立地、住居址数、貯蔵穴、墓壙群の有無、遺構配置、遺物の種類と量、遺跡の継続期間など、さまざまな側面を考慮にいれて縄文時代の遺跡の分類を試みた点で評価できる。しかしながら、現在までのところ、その研究は、「遺跡のタイポロジー」(小林1973:20)の段階にとどまっており、縄文時代のセトルメント・システムを具体的に論じるにはいたっていない⁽⁷⁾。

III. 行き詰まりの集落研究の打開へむけて

(1) 新しい枠組の必要性

前節では、①縄文時代集落研究の大部分は、和島以来の史的唯物論を理論的基盤としていること、②これらの研究の主たる関心は、縄文時代の社会的側面に向けられてきたこと、特に、定型的な遺構の配置から推測される社会的規制の存在が議論の焦点のひとつとなってきたこと、③定型的な大型集落の存在は、縄文人の定住性を示す証拠として解釈されてきたこと、④近年における集落遺跡の発掘資料の増加は、上記のような伝統的な縄文集落観を再検討する必要性を示していること、の4点を指摘した。

筆者は、「考古学が歴史学の一分野として、その役割を正しく果たすためには、社会構成史論から身をかわしては駄目だと考え」(和島1958b)て、困難な状況の中で集落研究を進めた和島の研究態度に敬意を払う。また、和島以来の集落研究は、遺物の編年研究にとどまらず、過去の人々の生活を具体的に明らかにしようと試みた点で、縄文時代研究史の中で高く評価されるべきであると考えている。しかしながら、縄文遺跡の規模、機能、居住期間等については、生業の季節性や資源

の分布状況との密接な関係が推測されることから、社会的な規制の研究に重点を置いた史的唯物論は、縄文時代の集落研究にとって必ずしも有効な枠組ではないと考える。

史的唯物論に基づいた集落研究のもうひとつの問題点は、縄文人の定住性は生産力の発展とともに強化されると考えてきた点にある。移動と定住を両極として過去の人々の居住形態を考えることは、文化の発展段階を論じる視点からは一定の意味を持つかもしれない。しかしながら、民族誌事例からみれば、居住地の移動には、生業の季節性に起因する季節的な移動や、数年を単位とする移動など、さまざまな種類があり、これを定住度という包括的な基準で評価することは適当ではない。したがって、定住-移動の具体的なあり方やその原因を不問に付したまま縄文人の定住性を論じることは、混乱を招くものとなる⁽⁸⁾。

以上のような理由から、筆者は、縄文時代の集落研究をさらに進めるためには、生業の季節性や資源の分布とセトルメント・パターンとの密接な関係を考慮に入れた、新しい枠組が必要であると考える。このような方法は、一般に、生態学的なアプローチと呼ばれているものの範疇に属する。

考古学における生態学的なアプローチは、大別すると三つに分けられる。第一は、自然環境が文化におよぼす一般的な影響を論じた文化生態学の方法である。このアプローチは、スチュワード(Steward 1955)にはじまり、1960年代から1970年代にかけてアメリカ考古学において広く用いられた(たとえば、Sanders 1965, 1968)。縄文時代の研究でいえば、北太平洋沿岸の狩猟・採集民との比較から、縄文人の住居の安定性・定住性と社会の安定性を論じた渡辺仁(渡辺1966, Watanabe 1986)の論考、石器と骨角器の判別分析の結果に基づいて、ことな環境への縄文人の適応を論じた赤澤(赤澤1984, Akazawa 1982a, 1982b, 1986, 1987, Akazawa and Maeyama 1986)の研究、日本と北アメリカ東部との環境の類似性に注目し、社会の発展と農耕の開始の問題を論じたエイケンズらの研究(Aikens 1981, Aikens et al. 1986)などが、これに近いものといえるであろう。このようなアプローチは、主として通文化的な比較ないし一般化を行う際に有効な方法である。

生態学的なアプローチとして第二にあげられる

のは、動・植物遺存体の同定・分析結果に基づいて過去の生業活動を推定しようとする試みである。縄文時代の研究におけるこのようなアプローチの例としては、ハマグリ成長線の分析から貝類採取の季節性を論じた小池裕子(小池1979, 1983, Koike 1973, 1980, 1986)による一連の研究、炭素ないし窒素安定同位体比法による食性の研究(チザム1985, Chisholm and Koike 1988, 小池・Chisholm 1988, Chisholm 他1988, 南川・赤澤1988, Roksandic et al. 1988)などがあげられる。近年におけるこの分野の急速な進歩は、これらの分析が、縄文時代の生業の研究に大きく貢献し得ることを示唆している。

上記のふたつのアプローチは、今後の縄文時代研究において、いずれも重要な位置を占めるものと予測される。しかしながら、本稿では、第三の生態学的なアプローチとして、資源の分布と、生業活動およびセトルメント・パターンとの関係を論じたモデルに注目したい。

資源の分布と、生業活動およびセトルメント・パターンとの関係についてのモデルの提示は、欧米における1970年代以降の狩猟・採集民研究の最大の研究成果のひとつである(Thomas 1986, 井川・佐原1985)。これらのモデルの提示は、主として考古学者による民族誌事例の調査結果(このような調査はエスノアーケオロジー〔ethnoarchaeology〕と呼ばれる)に依るところが大きい(たとえば, Yellen 1977)。さらに、動物生態学や地理学など他分野における種々のモデルを考古学資料に適用する試みも数多く行われている。

これらのモデルは、大別すると、特定の民族誌事例との比較(ethnographic analogy)に基づいて生業活動や集落の在り方を論じるインフォーマル・モデル(informal models)と、資源の分布と生業活動およびセトルメント・パターンとの間に一般的な数理的な関係を仮定するフォーマル・モデル(formal models)とに分けられる(Savelle and McCartney 1988, cf. Bettinger 1980)⁽⁹⁾ 前者のモデルが帰納的であるのに対し、後者は演繹的である。

資源の分布と生業活動およびセトルメント・パターンとの関係についてのモデルは、集落遺跡の資料を生業活動との関連で論じることを可能にする。このようなモデルに基づいた集落遺跡の分類

や解釈は、当然のことながら、社会的な規制の研究に重点をおいた史的唯物論の視点とは大きく異なってくる。

狩猟・採集民研究において用いられている種々のモデルの詳細は、ベティンジャー(Bettinger 1980, 1987)、ハーデスティ(Hardesty 1980)等が詳しく論じている。ここでは、縄文時代の研究に適用可能な一例として、ビンフォード(Binford 1980)によるフォーレジャー(foragers)とコレクター(collectors)のモデルを紹介する。

(2) ビンフォードによるフォーレジャーとコレクターのモデル

ビンフォードは、現存する狩猟・採集民には、集落・生業システム(settlement-subsistence system)において、基本的に二種類の戦略(strategies)が認められることを指摘し、これらの狩猟・採集民を、それぞれフォーレジャー、コレクターと呼称した。

フォーレジャー：ビンフォードによれば、フォーレジャーは、レジデンシャル・ベース(a residential base〔居住本拠地〕)の付近で獲得可能な資源に依存して生活しており、その付近の資源を利用しつくしたあとは、資源の豊富な他の地点にレジデンシャル・ベースを移動する。すなわち、フォーレジャーは、資源のあるところへ集団を次々と移動(mapping-on)させる。さらに重要なことは、フォーレジャーは、通常、食料の貯蔵を行わず、日々の食料をその日毎に集める点である。この点で、フォーレジャーの狩猟・採集活動は、長期的な計画性のあるコレクターの狩猟・採集活動とは区別される。

このような集落・生業システムは、資源の分布が比較的均質な地域において一般的に見られる。代表的なフォーレジャーの例として、ビンフォードは、アフリカ南部のグウィ・サン(G/wi San)、および赤道森林地帯の数多くの狩猟・採集民をあげている。

考古学的に観察可能なフォーレジャーの遺跡のタイプとしては、第一にレジデンシャル・ベースがあげられる。レジデンシャル・ベースにおける集団の規模や、レジデンシャル・ベースの移動の頻度は、資源の分布状態によって大きく異なる。資源が豊富な地域においては、レジデンシャル・

ベースにおける集団の規模と移動の頻度は増加するが、移動の距離は比較的短い。これに対し、資源が乏しく分散した地域では、集団の規模は縮小する傾向がある。

フォーレジャーの遺跡として第二にあげられるのは、ロケーション (a location) である。ロケーションは、食料や燃料など、種々の獲得活動が行われる場所である。典型的なロケーションとしては、木材を伐採した場所があげられる。

フォーレジャーは、貯蔵を行わないので、日々の獲得活動は小規模 (low bulk) であり、したがって、一回の活動によってロケーションに残される遺物の量は非常に少ない。資源の分布が特定の地点に限られている場合には、同一地点が複数回使用されることによって、見かけ上の遺物の集中 (palimpsest accumulations) が認められることもある。しかしながら、このような遺物の集積は、一回の使用によって廃棄された場合とは堆積状態が異なっているはずである。

コレクター：フォーレジャーが資源を獲得するために、レジデンシャル・ベースを資源の近くに移動させるのに対し、コレクターは、特定の資源を獲得するために、専門グループ (specially organized task groups) をレジデンシャル・ベースから派遣し、資源をレジデンシャル・ベースに持ち帰る。すなわち、コレクターは、集団のところへ資源を移動させる。したがって、コレクターの狩猟・採集活動は、フォーレジャーと異なり、計画的 (logistically) に組織されている。コレクターの戦略の重要な特徴のひとつは、食料の貯蔵を行うことである。

このようなコレクターの集落・生業システムは、重要な資源の分布が不均質な環境に適応したシステムである。複数の資源が互いに離れた場所に分布している場合、レジデンシャル・ベースの周囲だけではすべての資源を獲得することは不可能である。その結果、専門グループが組織され、レジデンシャル・ベースから離れた場所にある資源を獲得するために遠征を行う。これら専門グループは通常小人数で構成され、その作業に熟練した者が構成員として選ばれる。専門グループは、不特定の資源を求めてうろつきまわるのではなく、特定の資源を獲得するために組織的に活動する。

考古学的に観察し得るコレクターの遺跡の種類としては、レジデンシャル・ベース、ロケーションに加えて、さらに、フィールド・キャンプ (a field camp)、見張り場 (a station)、貯蔵所 (a cache) の三種類が想定される。フィールド・キャンプは、専門グループがレジデンシャル・ベースから離れている間の一時的なセンターであり、寝起きの場所である。実際の資源獲得活動は、フィールド・キャンプのまわりのロケーションで行われる。これらのロケーションでは、専門グループの構成員の即時的な消費のためだけでなく、レジデンシャル・ベースに残っている集団全員のため、さらに貯蔵のための獲得活動が行われるから、その活動は大規模 (high bulk) であり、考古学的証拠もフォーレジャーのロケーションと比べて豊富である。

見張り場は、専門グループが情報収集のために使用する場所である。ハンターの見張り場などがこれにあたる。貯蔵所は、コレクターの戦略において、きわめて一般的なもののひとつである。小規模の専門グループによって獲得された資源が大量の場合には、レジデンシャル・ベースに持ち帰る前に、獲得場所の付近に一時的に貯蔵されることが多いからである。このような貯蔵施設は、恒常的な使用を目的として作られている場合が多いが、獲得された資源の量が多い場合には特別の施設が作られる場合もある。

レジデンシャル・ベース、ロケーション、フィールド・キャンプ、見張り場、貯蔵所のそれぞれが別の地点に設けられるとは限らない。フィールド・キャンプが見張り場を兼ねる場合もある。別の場合には、獲物を殺し、解体した場所 (ロケーション) で、貯蔵が行われるかもしれない。

コレクターの集落・生業システムは、資源の分布が不均質な地域において一般的に認められる。代表的なコレクターとして、ビンフォードは、アラスカのヌナミュートの例をあげている。

フォーレジャーとコレクターは、集落・生業システムにおけるふたつの異なるタイプを示すのではなく、両者の相違は漸移的なものである。フォーレジャー・システムは、狩猟・採集民の基本であり、集落・生業システムの最も単純な形態を示す。これに、種々の要素が付け加えられて複雑化したものが、コレクター・システムである。したがって、コレクター・システムは、フォーレジャ

ー・システムの全ての要素を含むとともに、フォーレジャー・システムにはみられない新たな特徴を合わせ持つ。多くの狩猟・採集民は、両者の戦略を併用しているので、考古学的な資料として残る遺跡の特徴は、上記のように単純ではなく、複雑な多様性を示すことが多い。

(3) 縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点

以上、ビンフォードによるフォーレジャーとコレクターのモデルについて、その概要を説明した。このモデルの主たる特徴は、狩猟・採集民のセトルメント・システムを、資源の分布と生業戦略との関連において捉えている点にある。このモデルによれば、定住度の差異は、全体としての集落・生業システムの特徴の一部である。資源の分布と生業戦略の相違が、結果的には定住度を規定するが、全体としての定住度は、ビンフォードの論考の中では議論の焦点とはなっていない。巨視的に見るならば、コレクターがレジデンシャル・ベースを移動する頻度(residential mobility)はフォーレジャーに比して相対的に低いといえるが、コレクターのカテゴリーには、夏と冬でレジデンシャル・ベースを移動させる例が含まれているから、フォーレジャーとコレクターのモデルを、移動と定住のモデルと見なすことは間違いである。議論の焦点は、移動か定住か、にあるのではなく、全体としての集落・生業システムにある。

このようなビンフォードのモデルは、農耕民の居住の態を念頭に置いた定住―移動の二大別と比べて、狩猟・採集民の集落・生業システムの分析により適した枠組と考えられる。縄文時代遺跡からは、堅果類の貯蔵例(南方前池調査団1956, 潮見1977, 芝元・森1969, 1971, 渡辺誠1976)が知られているし、また、貯蔵穴と推定される遺構の検出例も数多いことから、縄文人はコレクターに分類される。ビンフォードのコレクターのモデルに基づいて縄文時代の集落遺跡を見直してみると、今までとは違った遺跡の分類が可能になる。

従来の縄文集落研究では、遺跡の分類は、年間を通じて居住が行われる拠点集落(狭義の集落、基地集落、またはベース・キャンプ)と季節的ないし一時的な野营地(露营地、またはキャンプ・サイト)に二大別されるのが一般的であった(た

とえば、後藤1970:68, 林1974:13)。これに対し、ビンフォードのいうレジデンシャル・ベースは、必ずしも年間を通じての居住を意味するものではない。コレクターのレジデンシャル・ベースが季節的に移動する例が示されていることは前述したが、より頻繁な移動を行うフォーレジャーの場合(ある例では、年間50回の移動が記録されている)でも、各居住地点はレジデンシャル・ベースと呼ばれている。すなわち、ビンフォードのいうレジデンシャル・ベースとフィールド・キャンプの違いは、その恒久性ないし定住性にあるのではなく両者の機能の違いにある。前者が、集団の構成員の日常的な生活の場であるのに対し、後者は、特定の資源の獲得を目的として前者から派遣された専門グループの寝起きの場である。

以上のような遺跡分類は、拠点集落＝通年的かつ定住的、野营地＝季節的ないし一時的と考える従来の縄文集落研究の伝統とは、根本的に異なった視点である。ビンフォードは、レジデンシャル・ベースが季節的である場合を認めているから、通年的居住＝レジデンシャル・ベース、季節的居住＝フィールド・キャンプという公式は成り立たない。したがって、考古学的資料から遺跡を分類するに際しては、季節的・一時的であるか否かという基準よりも、種々の獲得活動における各遺跡の機能のほうの問題となってくる。

遺跡の機能に関連してもうひとつ注意したいのは、このモデルが、異なった機能を有する遺跡が同一地点に重複している可能性を考慮に入れている点である。従来の縄文集落研究では、一遺跡は、その継続期間中、基本的には同一の機能を果たしていたとする暗黙の理解があった。たとえば、多数の住居址を伴う大規模遺跡を拠点集落として分類する場合、その分類は、遺跡の継続期間の中の特定の時点を想定するものではなく、全体としての遺跡に与えられた分類であった。しかしながら、ビンフォードによれば、同一地点がある時期には特定の機能を果たし、別の時期には他の機能を果たすという例はまれなことではない(Binford 1983:384)。したがって、遺跡の機能を推測する場合にも、一遺跡＝機能という先入観にとらわれずに、遺跡の使用期間における各時点の利用状況を注意深く検討する必要がある。

遺跡の機能と並んで注目されるのは、レジデン

シャル・ベースの規模の問題である。ビンフォードがコレクターの一例としてあげているヌナミュートの例では、冬期のレジデンシャル・ベースは大規模であるのに対し、その構成員は、夏期には分散し、小規模なレジデンシャル・ベースを複数構える。したがって、各レジデンシャル・ベースの居住人数は、季節によって大きく変動する。

近年の縄文集落の研究では、一軒ないし数軒の住居址しか伴わない、小規模な遺跡の存在が注目されている（土井1985, 小栗1985, Habu 1988, 羽生1989, 黒尾1988）。ビンフォードのコレクター・モデルに基づいて考えるならば、これらの小規模な縄文集落遺跡は、集団が分散した時期のレジデンシャル・ベースであった可能性もある。

以上、ビンフォードのフォーレジャーとコレクターのモデルを例として、縄文時代の集落・生業システムの研究に世界の狩猟・採集民研究のモデルを応用する可能性について論じてきた。ビンフォードのモデルは、狩猟・採集民の集落・生業システムの一般的なモデル化を目指したものであるが、コレクター・モデルの基本となっているのは、アラスカにおけるヌナミュートの民族事例である。その点で、ビンフォードのモデルを実際に温帯の縄文文化に適用する際には、モデルの修正が必要かもしれない。しかし、筆者がここで強調したいのは、考古資料を解釈する際のこのようなモデルの重要性である。モデルを使用することの主な利点は、考古学的資料と過去の人々の行動との間にモデルを介在させることによって、後者を具体的に論じることが可能になる点である。集落研究に限定するならば、モデルから想定される遺跡の種類と、実際の考古学資料の分類との間に対応関係を見出すことによって、単なる遺跡の分類にとどまることなく、過去の具体的なセトルメント・システムを論じることが可能になる。

縄文時代の集落遺跡については、近年、膨大な量の資料が各地で蓄積されてきている（たとえば、東京都埋蔵文化財センター1988）。しかしながら、遺跡の分類とその機能の解釈との間には、論理的な飛躍がある場合が少なくない。上記のフォーレジャーとコレクターのモデルは、このような遺跡の分類とその機能の解釈との間のギャップを埋めるひとつの方法を示唆するものと考ええる。この点で、近年における世界の狩猟・採集民研究の進展

は遠い外国の出来事ではなく、縄文時代の集落と生業の研究にとっても有力な武器となる可能性を含んでいるのである。

IV. おわりに

本稿では、縄文時代の集落研究の歩みを概観するとともに、狩猟・採集民研究との接点を中心として、今後の集落研究の可能性を論じてきた。最後に、これまで述べてきたことと関連し、将来の課題として二点を指摘して、本稿の結びとしたい。

第一の課題は、集落研究と生業研究との共同作業の必要性である。本稿を通じて強調してきたように、集落の規模や位置、移動の頻度などは、当時の人々の生業活動に強く規制されていたと考えられる。したがって、縄文集落の機能や集落の規模といった問題を論じる際には、生業の研究が必要不可欠である。逆に、動・植物遺存体の遺存状況が劣悪な日本においては、動・植物遺存体のみを用いて縄文人の生業を復元することも非常に困難であり、遺跡の規模や分布、人工遺物の量や種類などの分析が、生業の研究に重要な情報を提供することになる。これからの縄文時代研究では、集落の研究と動・植物遺存体の同定との密接な共同作業が不可欠である。

第二の課題は、いわゆる「縄文農耕論」の再検討に関する問題である。縄文時代の集落・生業研究の枠組として狩猟・採集民のモデルを使うという考え方は、必ずしも、縄文時代における栽培植物の存在を否定するものではない。近年における植物遺存体の分析結果（粉川1979, 笠原1981, 松谷1981a, 1981b, 1983, 1984, 1988, 藤下1981, 1983, 1984, 梅本・森脇1983, Crawford et al. 1978など）は、むしろ、縄文時代に栽培植物が存在した可能性を真剣に検討しなおす必要を示唆している。ただし、縄文時代の人々の生活が基本的には狩猟・採集に依存していたのであれば、たとえ原始的な植物栽培が存在したとしても、狩猟・採集民のモデルによって縄文時代の集落を論じることが可能であると考えられる⁽¹⁰⁾

狩猟・採集民のモデルにみられる生業戦略やセトルメント・パターンと縄文遺跡の資料とを比較するということは、縄文時代遺跡から得られた考古資料が、狩猟・採集を中心とした生業の枠組によって説明可能であるか否かを検討するというこ

とである。縄文集落の資料が、狩猟・採集民のモデルでは説明できない場合には、農耕の重要性について再検討する必要があるかもしれない。

縄文時代の集落・生業システムの研究は、発掘資料の豊富さの点では、世界でも第一級の恵まれた分野である。私達日本考古学者は、環境の乱開発と引き換えに手にしたこれらの貴重な資料をいたずらに眠らせることなく、責任を持ってその解釈を示す義務がある。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、井川史子先生には、草稿をお読みいただき、温かい御指導・御助言をいただいた。欧米の狩猟・採集民研究については Professor J. M. Saville より、セトルメント・アーケオロジー全般については Professor B. G. Trigger より種々の御教示をいただいた。C. Fawcett, 小林正史の両氏は、縄文時代の集落研究史をまとめるにあたり、有益な示唆を与えて下さった。また、文献の収集に当たっては、阿部祥人、五十嵐彰、加藤緑、熊崎保、河野広幸、五味一郎、小宮孟、辻本崇夫、橋口定志、樋口秀信、松谷暁子、山口剛志の諸先生・諸氏の御世話になった。末筆ながら、これらの方々に深く感謝の意を表する。なお、文責はすべて筆者にある。

注

- (1) 渡部は、1927年に日本共産党に入党、1928年に、3. 15事件の一斉検挙で逮捕され、獄中で、『治安維持法という『国体』の秘密を科学的に究明し、プロレタリアートと人民の闘争に『不可欠の武器を提供』しようという強い問題意識から、日本国家の成立過程、日本の原始社会、古代社会を研究しようと決意」し、古代史の研究をはじめた(犬丸1976:275)。戦前の代表的なマルクス主義歴史学者のひとりである。
- (2) ヒッグスとヴィタ・フィンジ(Higgs and Vita-Finzi 1972:30)によれば、テリトリー(territory)とは、日常的に食料などの調達が行われる領域(an area which is habitually exploited)として定義される。この概念は、石器の原材料獲得その他の非日常的な行動範囲をも含むキャッチメント(catchment)の概念とは区別される。テリトリーの概念は、もと
- もと生態学において使用されたものであり、類似の概念としては、ホーム・レインジ(home range)の概念がある。ホーム・レインジが、食料の調達その他の日常行動における通常の活動範囲を意味するのに対し、狭義のテリトリーは、外部に対して防衛的な性格を持つ点で区別される(両者の区別については小池1987を参照)。しかしながら、日常的な行動の領域は、時によっては排他的であり、時によってはそうではないとの指摘もあることから、ヒッグスとヴィタ・フィンジは、日常的な行動の領域を考古学的なテリトリーとして定義している。
- (3) ヒッグスとヴィタ・フィンジは、地理学における空間分析の結果や、リー(Lee 1969)のクン・サン(!Kung San [Bushman])の研究に基づき、狩猟・採集民のテリトリーを半径約10キロメートル、農耕民のテリトリーを半径約5キロメートルとする作業仮説を示している。この数値は、それぞれ歩行時間2時間と1時間の範囲を基準としたものであり、具体的に個々の遺跡のテリトリーを推定するに際しては、現地において歩行実験を行い、地形その他の要因を考慮にいたした上で推定を行うことを主張している。この方法は、サイト・キャッチメント分析(site catchment analysis)と呼ばれる。
- (4) 小林は、パターンI~VIとしているが、原文ではType I~VIである。
- (5) アメリカ考古学界では、ペルーにおけるウィリー(Willey 1953)のヴィルー溪谷の調査をそのはじめとして、アダムス(Adams 1965)のメソポタミア・ディヤラ川流域の調査、サンダース(Sanders 1965, 1968)のメキシコ盆地テオティワカン溪谷の調査など、分布調査に基づいたセトルメント・システムの研究が、1950年代~1960年代を通じて注目を集めていた。これらの一連の研究およびチャン(Chang 1958, 1962, 1968)らの研究は、総称してセトルメント・アーケオロジー(settlement archaeology)と呼ばれている。
- (6) キーリーは、ビンフォードやロングエイカー(Longacre)などの研究もセトルメント・アーケオロジーに含めているが、アメリカ考古学でセトルメント・アーケオロジーという場合には、註(5)であげた一連の研究の流れを汲むものに限定して用いられることが多い。

- (7) 小林のセトルメント・パターン論に基づいた最近の研究例としては、宮崎博(1986)の論考があげられる。宮崎は、小林のセトルメント・パターンA～Fの分類を用いて中期後半の遺跡群を分類し、縄文人の領域の推定を試みた。ただし、宮崎は、大規模遺跡(AないしBパターン)と小規模遺跡(CないしDパターン)の分布状態から領域を推定しており、その意味では、小林のセトルメント・パターン論に基づいた研究というよりも、むしろ市原(1959)、向坂(1970)、堀越(1972)らの研究の延長線上に位置するものといえる。
- (8) 定住の定義が不明確であることも、議論の混乱を招いているひとつの原因である。西田(1986: 16)によれば、定住とは、「数家族からなる集団が、少なくとも一年間以上にわたって一カ所の根拠地(＝村)を継続的に維持し、季節の変化に応じたさまざまな活動のほとんどを、村から通える範囲内でおこなっている生活」と定義される。これに対し、渡辺仁(1966)は、定住的生活のカテゴリーの中に季節的移動(seasonal shift of residence または seasonal migration)を含めている(ただし、渡辺は、北方採集民の多くは季節的に住居を変えるが、その場合でも集落全員が移動するのではなく、一部は“冬家”あるいは“冬集落”と呼ばれる恒久的住居〔home base〕にとどまることを指摘している)。
- (9) インフォーマル・モデルの例としては、カラハリ砂漠におけるクン・サン人の狩猟・採集行動を論じたりー(Lee 1968, 1969)の研究等があげられる。フォーマル・モデルの例としては、資源の利用効率を最大限にするという原則に基づいて、狩猟対象とする動物の種類、集落の位置、集団の規模などが限定され则认为、オプティマル・フォーレンジング・セオリー(optimal foraging theory: Smith 1983)などがあげられる。
- (10) 狩猟・採集を基本としながら原始的な農耕を補助的に行っていたと考えられる例としては、大盆地(Great Basin)におけるフリモント文化(Fremont Culture [A.D. 350-1300]; Madsen 1982)、イリノイ川下流域における中期ウッドランド文化(200B.C.-A.D. 400; Struever 1968)等があげられる。

文 献 (A B C 順)

Adams, R. M., 1965: *Land Behind Baghdad*. The

University of Chicago Press, Chicago.

- Aikens, C. M., 1981: The last 10,000 years in Japan and Eastern North America. In *Senri Ethnological Studies No. 9: Affluent Foragers*, edited by S. Koyama and D. H. Thomas, pp. 261-273. National Museum of Ethnology, Osaka.
- Aikens, C. M., K. M. Ames and D. Sanger, 1986: Affluent collectors at the edges of Eurasia and North America. In *Prehistoric Hunter-Gatherers in Japan, The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin No. 27*, edited by T. Akazawa and C. M. Aikens, pp. 3-26. University of Tokyo Press, Tokyo.
- Akazawa, T., 1980: Fishing adaptation of prehistoric hunter-gatherers at the Nittano Site, Japan. *Journal of Archaeological Science*, 7: 325-344.
- Akazawa, T., 1982a: Jomon people's subsistence and settlements. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 90 (Supplement): 55-76.
- Akazawa, T., 1982b: Cultural change in prehistoric Japan. In *Advances in World Archaeology*, 1, edited by F. Wendorf and A. F. Close, pp. 151-211. Academic Press, New York.
- 赤澤 威, 1984: 日本の自然と縄文文化の地方差。日本人類学会編, 人類学, pp. 14-29。日経サイエンス社。東京。
- Akazawa, T., 1986: Regional variation in procurement systems of Japan. In *Prehistoric Hunter-Gatherers in Japan, The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin No. 27*, edited by T. Akazawa and C. M. Aikens, pp. 73-89. University of Tokyo Press, Tokyo.
- Akazawa, T., 1987: Variability in the types of fishing adaptation of the later Jomon hunter-gatherers, c. 2500 to 300 bc. In *The Archaeology of Prehistoric Coastlines*, edited by G. Bailey and J. Parkinson, pp. 78-92. Cambridge University Press, Cambridge.
- Akazawa, T. and K. Maeyama, 1986: Discriminant function analysis of Later Jomon settlements. In *Windows on the Japanese Past*, edited by R. Pearson, G. L. Barnes and K. L. Hutterer, pp. 279-292. Center for Japanese Studies, University of Chicago Press, Chicago.

- sity of Michigan, Ann Arbor.
- 麻生 優, 1960: 縄文時代後期の集落。考古学研究 7 (2): 9-16。
- Bettinger, R. L., 1980: Explanatory/ predictive models of hunter-gatherer adaptation. In *Advances in Archaeological Method and Theory*, 3:189-255. Academic Press, New York.
- Bettinger, R. L., 1987: Archaeological approaches to hunter-gatherers. *Annual Review of Anthropology*, 16: 121-142.
- Binford, L. R., 1980: Willow smoke and dogs' tails. *American Antiquity*, 45(1): 4-20.
- Binford, L. R., 1983: Long-term land-use patterning. In *Working at Archaeology*, by L. R. Binford, pp. 379-386. Academic Press, New York.
- Campbell, J. M., 1968: Territoriality among ancient hunters. In *Anthropological Archeology in the Americas*, edited by B. J. Meggers, pp. 1-21. The Anthropological Society of Washington, Washington D.C.
- Chang, K. C., 1958: Study of the Neolithic social grouping: examples from the New World. *American Anthropologist*, 60(2): 298-334.
- Chang, K. C., 1962: A typology of settlement and community patterns in some circumpolar societies. *Arctic Anthropology*, 1(1): 28-41.
- Chang, K. C. (ed.), 1968: *Settlement Archaeology*. National Press Books, Palo Alto.
- チザム, ブライアン・S., 1985: 古代人は何を食べていたか: 人骨の炭素同位体比による分析法。科学朝日11月号: 126-130。
- Chisholm, B. S. and H. Koike, 1988: Stable carbon isotopes and paleodiet in Japan. 昭和63年度日本文化財科学会大会研究発表要旨, pp. 64-65. 日本文化財科学会。
- Chisholm, B. S.・小池裕子・中井信之, 1988: 炭素安定同位体比法による古代食性の研究。考古学と自然科学 20: 7-16。
- Crawford, G. W., W. M. Hurley and M. Yoshizaki, 1978: Implications of plant remains from the Early Jomon, Hamanasuno Site. *Asian Perspectives*, 19: 145-155.
- 土井義夫, 1985: 縄文時代集落論の原則的問題。東京考古 3: 1-11。
- 藤森栄一, 1966: 原始古代聚落の考古学的研究について。歴史教育14(3): 1-11。
- 藤下典之, 1981: 鳥浜貝塚より出土したウリ科植物の種子について。福井県教育委員会編, 鳥浜貝塚1980年度調査概報: 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 2, p. 88. 福井。
- 藤下典之, 1983: 菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo L.* とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子について。中島直幸・田島龍太編, 菜畑遺跡, pp. 455-463. 唐津市教育委員会。
- 藤下典之, 1984: 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法。文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班編, 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学—総括報告書一, pp. 638-654。
- ふれいく同人会, 1971: 水野正好氏の縄文時代集落論批判。ふれいく 1: 1-34。
- 後藤和民, 1970: 原始集落研究の方法論序説。駿台史学 27: 63-124。
- 後藤和民, 1988: 縄文集落論。桜井清彦・酒詰秀一編, 論争・学説日本の考古学 2: 先土器・縄文時代 I, pp. 137-190. 雄山閣, 東京。
- Habu, J., 1988: Numbers of pit dwellings in Early Jomon Moroiso Stage sites. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 96(2): 147-165.
- 羽生淳子, 1989: 住居址数からみた遺跡の規模。慶応義塾大学民族学考古学研究室編, 考古学の世界, pp. 71-92. 新人物往来社, 東京。
- 原秀三郎, 1972: 日本における科学的原始・古代史研究の成立と展開。原秀三郎編, 歴史科学体系 1, pp. 343-409. 校倉書房, 東京。
- Hardesty, D. L., 1980: The use of general ecological principles in archaeology. *Advances in Archaeological Method and Theory*, 3: 157-187. Academic Press, New York.
- 林謙作, 1974: 縄文期の集団領域: 仙台湾沿岸を中心とした予察。考古学研究 20(4): 12-19。
- 林謙作, 1975: 縄文期の集団領域(補論)。考古学研究 21(3): 33-40。
- 林謙作, 1979: 縄文期の集落と領域。大塚初重・戸沢充則・佐原真編, 日本考古学を学ぶ 3: 原始・古代の社会, pp. 102-119. 有斐閣, 東京。
- Higgs and Vita-Finzi 1972: Prehistoric economies: a territorial approach. In *Papers in Economic*

- Prehistory*, edited by E. S. Higgs, pp. 27-36. Cambridge University Press, London.
- 堀越正行, 1972: 縄文時代の集落と共同組織: 東京湾沿岸地域を例として。駿台史学31: 1-29。
- 井川史子・佐原真, 1985: 狩猟史研究へのアプローチ。歴史公論11(5): 127-148。
- 市原壽文, 1959: 縄文時代の共同体をめぐって。考古学研究 6(1): 8-20。
- 市原壽文, 1984: 和島誠一論。加藤晋平・小林達雄・藤本強編, 縄文文化の研究 10: 縄文時代研究史, pp. 241-252。雄山閣, 東京。
- 犬丸義一, 1976: 渡部義通。永原慶二・鹿野政直編, 日本の歴史家, pp. 275-283。日本評論社, 東京。
- 石井寛, 1977: 縄文社会における集団移動と地域組織。調査研究集録 2: 1-42。港北ニュータウン埋蔵文化財調査団, 横浜。
- 泉靖一, 1962: 原始共同体論。古代史講座II, pp. 200-239。学生社, 東京。
- 笠原安夫, 1981: 鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実・タール状塊について。福井県教育委員会編, 鳥浜貝塚 1980年度調査概報: 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 2, pp. 65-87。福井。
- キーリー, C. T., 1971: セトルメント・アーケオロジー。信濃 23(2): 200-209。
- 小林達雄, 1973: 多摩ニュータウンの先住者。月刊文化財 112: 20-26。
- 小林達雄, 1980: 縄文時代の集落。国史学 110, 111: 1-17。
- 小林達雄, 1981: 縄文時代の集落景観。地理26(9): 55-61。
- 小林達雄, 1986: 原始集落。岩波講座日本考古学 4: 集落と祭祀, pp. 37-75。岩波書店, 東京。
- 小林達雄, 1988: 広域調査の現状と課題。東京都埋蔵文化財センター, 縄文人の生活領域を探る, pp. 2-4。
- 小栗一夫, 1985: 縄文前期集落の構造。法政考古学10: 47-67。
- Koike, H., 1973: Daily growth lines of the clam, *Meretrix lusoria*. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 81(2): 122-138。
- 小池裕子, 1979: 関東地方の貝塚遺跡における貝類採取の季節性と貝層の堆積速度。第四紀研究17(4): 267-278。
- Koike, H., 1980: *Seasonal Dating by Growth-Line Counting of the Clam, Meretrix lusoria*. *University Museum, University of Tokyo, Bulletin No.18*. University of Tokyo Press, Tokyo。
- 小池裕子, 1983: 貝類分析。加藤晋平・小林達雄・藤本強編, 縄文文化の研究 2: 生業, pp. 221-237。雄山閣, 東京。
- Koike, H., 1986: Jomon shell mounds and growth-line analysis of molluscan shells. In *Windows on the Japanese Past*, edited by R. Pearson, G. L. Barnes and K. L. Hutterer, pp. 267-278. Center for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor。
- 小池裕子, 1987: 宮崎博論文「土地と縄文人」に関する先生生態学からの一コメント。貝塚 39: 10-11。
- 小池裕子・B. Chisholm, 1988: 炭素安定同位体比法による日本産哺乳動物の食性分析法の検討。埼玉大学紀要(総合編) 6: 107-115。
- 粉川昭平, 1979: 縄文時代の栽培植物。考古学と自然科学 12: 110-114。
- Koyama, S., 1978: Jomon subsistence and population. *Senri Ethnological Studies*, 2: 1-65. National Museum of Ethnology, Osaka。
- 小山修三, 1984: 縄文時代。中公新書 733。中央公論社, 東京。
- 黒尾和久, 1988: 縄文時代中期の居住形態。歴史評論 454: 9-21。校倉書房, 東京。
- Lee, R. B., 1968: What hunters do for a living, or how to make out on scarce resources. In *Man the Hunter*, edited by R. B. Lee and I. DeVore, pp. 30-48. Aldine, Chicago。
- Lee, R. B., 1969: !Kung Bushman subsistence. In *Environment and Cultural Behaviour*, edited by A. P. Vayda, pp. 47-79. Natural History Press, Garden City, New York (Reprinted by University of Texas Press, Austin and London.)
- Madsen, D. B., 1982: Get it where the gettin's good. In *Man and Environment in the Great Basin: SAA Papers No. 2*, edited by D. B. Madsen and J. F. O'Connell, pp. 207-226. Society for American Archaeology, Washington D.C.
- 松村暁・八幡一郎・小金井良精, 1932: 東京帝國大學理學部人類學教室研究報告第五編: 下總姥山ニ於ケル石器時代遺跡貝塚ト其ノ貝層下發見の住居址。東京帝國大學。
- 松谷暁子, 1981a: 灰像と炭化像による縄文時代の作

- 物栽培の探求。考古学ジャーナル 192: 18-21。
- 松谷暁子, 1981b: 長野県諏訪郡原村大石遺跡出土の
タール炭化種子の同定について。長野県中央道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書: 茅野市・原村
その1, 富士見町その2, pp. 141-143。長野。
- 松谷暁子, 1983: エゴマ・シソ。加藤晋平・小林達雄・
藤本強編, 縄文文化の研究2: 生業, pp. 50-62。
雄山閣, 東京。
- 松谷暁子, 1984: 走査電顕像による炭化種実の識別。
文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班編,
古文化財に関する保存科学と人文・自然科学——総
括報告書——, pp. 630-637。
- 松谷暁子, 1988: 電子顕微鏡でみる縄文時代の栽培植
物。佐々木高明・松山利夫編, 畑作文化の誕生,
pp. 91-117。日本放送出版協会, 東京。
- 南川雅男・赤澤 威, 1988: 縄文人の食糧摂取。遺伝
42 (10): 15-23。
- 南方前池遺跡調査団, 1956: 岡山県山陽町南方前池遺
跡。私たちの考古学7: 2-7。
- 三澤章, 1936: 金属文化の輸入と生産経済の発達。渡
部義通・三澤章・伊豆公夫・早川二郎, 日本歴史
教程第一冊——原始社会の崩壊まで——, pp. 142-
202。白揚社, 東京。
- 三澤章, 1937: 古墳文化と考古学。日本歴史教程第二
冊——国土統一より大化改新まで——。白揚社,
東京。(引用は, 和島誠一, 1973: 日本考古学の発
達と科学的精神: 和島誠一主要著作集, pp. 196-
229, 和島誠一著作集刊行会, 岡山, より。)
- 宮坂英式, 1946: 尖石先史聚落址の研究(梗概): 日本
石器時代中部山岳地帯の文化。諏訪史談會會報3:
16-25。
- 宮坂英式, 1950: ハヶ岳西山麓奥助尾根先史聚落の形
成についての一考察。考古学雑誌 36(3): 167-178,
36(4): 257-261。
- 宮坂英式, 1957: 尖石。茅野町教育委員会。(1975年に
茅野市教育委員会より復刻。)
- 宮崎博, 1986: 土地と縄文人, 物質文化 47: 1-18。
- 水野正好, 1963: 縄文式文化期における集落構造と宗
教構造。日本考古学協会第29回総会研究発表要旨:
11-12。
- 水野正好, 1968: 環状組石墓群の意味するもの。信濃
20(4): 255-263。
- 水野正好, 1969a: 縄文時代集落復原への基礎的操作。
古代文化 21(3,4): 1-21。
- 水野正好, 1969b: 縄文の社会。日本文化の歴史1:
大地と呪術, pp. 199-202。
- 水野正好, 1970: なぜ縄文時代集落論は必要なのか。
歴史教育18(3): 15-24。
- 向坂綱二, 1970: 原始時代郷土の生活圏。古島俊雄・
和歌森太郎・木村礎編, 郷土史研究講座1: 郷土
史研究と考古学, pp. 257-299。朝倉書店, 東京。
- 村田文夫, 1974: 川崎市潮見台遺跡の縄文中期集落復
原への一試論。古代文化26: 179-209。
- 永原慶二, 1974: マルクス主義歴史学について, 永原
慶二編, マルクス主義研究入門4: 歴史学, pp. 3-
13。青木書店, 東京。
- 長崎元広, 1973: ハヶ岳西南麓の縄文中期集落におけ
る共同祭式のありかたとその意義。信濃25(4): 292-
313, 25(5): 446-463。
- 長崎元広, 1977: 中部地方の縄文時代集落。考古学研
究 23(4): 1-8。
- 長崎元広, 1980: 縄文集落研究の系譜と展望。駿台史
学50: 51-96。
- 西田正規, 1986: 定住革命。新曜社, 東京。
- 丹羽祐一, 1982: 縄文時代の集団構造。小林行雄先生
古稀記念論集, pp. 41-74。
- 大林太良, 1971: 縄文時代の社会組織。季刊人類学2
(2): 3-83。
- 岡本勇, 1975: 原始時代の生産と呪術。岩波講座日本
歴史1: 原始および古代, pp. 75-112。岩波書店,
東京。
- 大塚久雄, 1955: 共同体の基礎理論。岩波書店, 東京。
- Roksandic, Z., M. Minagawa and T. Akazawa,
1988: Comparative analysis of dietary habits
between Jomon and Ainu hunter-gatherers from
stable carbon isotopes of human bone. *Journal
of the Anthropological Society of Nippon*, 96(4):
391-404。
- 酒詰伸男・乙益重隆・和島誠一・島田暁・寺内武夫,
1940: 埼玉縣入間郡水谷村水子・大應寺前貝塚調
査報告。考古学11(2): 90-116。
- Sanders, W. T., 1965: *The Cultural Ecology of the
Teotihuacan Valley*. Department of Sociology &
Anthropology, The Pennsylvania State Univer-
sity.
- Sanders, W. T., 1968: Hydraulic agriculture, economic
symbiosis and the evolution of states in central
Mexico. In *Anthropological Archaeology in the*

- Americas*, edited by B. J. Meggers, pp. 88-107. The Anthropological Society of Washington, Washington D. C.
- Savelle, J. M. and A. P. McCartney, 1988: Geographical and temporal variation in Thule Eskimo subsistence economies. *Research in Economic Anthropology*, 10: 21-72.
- 潮見浩, 1977: 縄文時代の植物食。松崎寿和先生退官記念事業会編, 考古論集——慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集——, pp. 121-144。
- 芝元静雄・森醇一郎, 1969: 坂の下遺跡。木下之治・芝元静雄・森醇一郎, 佐賀県西松浦郡西有田町縄文遺跡, 佐賀県文化財報告書第18集, pp. 48-83。佐賀県教育委員会。
- 芝元静雄・森醇一郎編, 1971: 佐賀県西有田町坂の下縄文遺跡第二次発掘調査。佐賀県文化財調査報告書第19集。佐賀県教育委員会。
- Smith, E. A., 1983: Anthropological applications of optimal foraging theory. *Current Anthropology*, 24(5): 625-651.
- Steward, J. H., 1955: *Theory of Culture Change*. University of Illinois Press, Urbana. 米山俊直・石田絳子訳 1979: 文化変化の理論。弘文堂, 東京。
- 菅原正明, 1972: 縄文時代の集落。考古学研究 19(2): 47-63。
- Struever, S., 1968: Woodland subsistence-settlement systems in the Lower Illinois Valley. In *New Perspectives in Archeology*, edited by S. R. Binford and L. R. Binford, pp. 285-312. Aldine, Chicago.
- 勅使河原彰, 1988: 縄文時代集落をめぐる問題。歴史評論 466: 112-125。校倉書房, 東京。
- Thomas, D. H., 1986: Contemporary hunter-gatherer archaeology in America. In *American Archaeology Past and Future*, edited by D. J. Meltzer, D. D. Fowler and J. A. Sabloff, pp. 237-276. Smithsonian Institution Press, Washington D. C.
- 東京都埋蔵文化財センター, 1988: 縄文人の生活領域を探る——広域調査の現状と課題——。
- 藤間生大, 1951: 日本民族の形成。岩波書店, 東京。
- 坪井清足 1962: 縄文文化論, 岩波講座日本歴史 1: 原始および古代(1), pp. 109-138。岩波書店, 東京。
- 梅本光一郎・森脇勉, 1983: 縄文期マメ科種子の鑑定。福井県教育委員会編, 鳥浜貝塚 1981・82年度調査概報・研究の成果: 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 3, pp. 42-46。福井。
- Vita-Finzi, C. and E. S. Higgs, 1970: Prehistoric economy in the Mount Carmel area of Palestine: site catchment analysis. *Proceedings of the Prehistoric Society*, 36: 1-37.
- 和島誠一, 1948: 原始聚落の構成。東京大学歴史学研究会編, 日本歴史学講座 1, pp. 1-32。学生書房, 東京。
- 和島誠一, 1955: 集落址。和島誠一編, 日本考古学講座 1: 考古学研究法, pp. 46-74。河出書房, 東京。
- 和島誠一, 1958 a: 南堀貝塚と原始集落。横浜市史 1, pp. 29-46。
- 和島誠一, 1958 b: 国民に背を向けた発掘と国民とともにする発掘。歴史評論 96: 6-7。
- 和島誠一, 1962: 序説: 農耕牧畜発生以前の原始共同体。古代史講座 II, pp. 1-16。学生社, 東京。
- 渡辺仁, 1964: アイヌの生態学と本邦先史学の問題。人類学雑誌 72(1): 9-23。
- 渡辺仁, 1966: 縄文時代人の生態。人類学雑誌 74(2): 73-84。
- Watanabe, H., 1986: Community habitation and food gathering in prehistoric Japan. In *Windows on the Japanese Past*, edited by R. J. Pearson, G. L. Barnes and K. L. Hutterer, pp. 229-254. Center for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor.
- 渡辺誠, 1976: 縄文時代の植物食。雄山閣, 東京。
- Wiley, G. R., 1953: *Prehistoric Settlement Patterns in the Viru Valley, Peru*. Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology, Bulletin 155 Washington D.C.
- Yellen, J., 1977: *Archaeological Approaches to the Present*. Academic Press, New York.

